『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）　第８巻　第３号　2006 年２月　19 頁～ 39 頁

フロイトの「人間論」

― デーモンと自立 ―

飯　岡　秀　夫

FREUD'S discussion on "human being"

― demon and independence ―

Hideo IIOKA

目　次

序．本稿の目標、焦点、テーマ　－デーモンと自立－

第１章　「自然史的過程」と人間（心的人格）―「外界」⇒「本能」⇒「心的人格」―

1．「外界」という激流にもまれる木葉

2．人間の流儀に応じた「生⇒ 死」の経路

3．「生の本能」と「死の本能」の混合と解離

4．「自由に動き得るエネルギー」の「拘束されたエネルギー」への転化

第２章「自我」と、「エス」及び「外界」

1．「外界」対「内界」

2．「エス」

3．「自我」、その形成、その役割

4．人間的「自我」の形成

第３章　「父親」殺し　―「高貴」なもの、「道徳的」なもの、「超個人的」なものの歴史的起源―

1．「唯物史観」との別れ　―「自我理想・超自我」の役割―

2．「父親」殺し　―トーテムとタブー

3．「遺伝」によって受け継がれたある重大な出来事の沈澱

第４章　「超自我」　―文化・伝統の担い手―

1．「自我」による「抑圧」

2．「理想自我（Idea1ich）」と「自我理想（Ichidea1）」

3．「超自我」形成の二つの要因　―生物学的要因と種族（系統）発生的要因―

4．エディプス・コンプレクスとその解消
5．「超自我」とその攻撃性
6．「文化的過去」の担い手　―「種族的素質」・「文化・伝統」の継承―
結び．「自我」の自立　―三様のデーモン―

序．本稿の目標、焦点、テーマ　―デーモンと自立―

本稿のめざすところはフロイトの「文明論」の土台を論ずることにある。フロイトの「文明論」はその「人間論」―人間本性の理解・把握―の上に展開されているので、その「文明論」を論ずるためには、まず、その「人間論」を論じておかなければならないのである。[1)]

1920年1月、スペイン風邪で突如娘ゾフィーを失った時、フロイトはその夫に、娘の生命を奪った「運命の力」について、「より高い力が、無力で哀れなわれわれ人間を弄んでいるのです。」[2)] と書き送っている。人間は何か「未知なもの」―「大いなるX」[3)] ―に支配されて動かされている、別言すれば、人間は「統御できない未知の力」によって生かされている。しかも人間は自分の内と外から自分を翻弄する、この「デモニッシュな力〈デーモン〉」について理解することも、さらに、そのような力が外だけではなく自分の内にも存在することにすら気づいていない。

フロイトは人間をおそれおののく「不安」の主体ととらえた。人間を不安におとしめる元凶は、かのわけのわからない「デモニッシュな力」であり、「不安」を感受するのは「心的人格」の主座を占める「自我」である。

「自我」は「外界」という「デモニッシュな力」に翻弄され、その「危険状況」のなかで不安におとしめられている。「自我」を不安におとしめるものは「外界」だけではない。「自我」はそもそもそのような力が自分の中にあることすら気づいていない「エス」によって翻弄され、その「危険状況」のなかで内奥から不安を感じさせられている。しかし、「自我」にとっての最大の不安は「死の不安」である。フロイトにあって「運命の力」・「デモニッシュな力」つまり「デーモン」の究極の正体は「死の不安」を感じさせる力であるとされている。

> 「死の不安は去勢の不安と類似のものと考えられ、自我が反応するその状況は、保護者である超自我―運命の力―から見棄てられることであり、このためにあらゆる危険にたいする保障がなくなってしまうことである。」（参考文献［Ⅶ］、6、P.349）。

「運命の力」・「デモニッシュな力」は現実的には「両親の力・神の力・運命の力」となってたちあらわれ、さらにそれが、「超自我」となって、人間―「心的人格」―のなかに住みつくのだ。

かくして「自我」は［外界］からの脅威、「エス」のリビドーからの脅威、「超自我」の厳格さからくる脅威という、三様の力（デーモン）に翻弄され、その結果、三様の脅威⇒危険に対応する、三様の不安にさいなまれることになる。

本稿の焦点はこの三様の不安にさいなまれながらも、なおかつ、かの「デモニッシュな力」にた

ちむかい、「自立」をかちとっていく「自我」のあり方にあてられている。

しかし「デモニッシュな力」に対する「自我」の「自立（確立）」ということに関しては、フロイトは極めて悲観的な見方をしている。

「精神分析学は、いわゆる身体的随伴現象といわれているものが、本質的に精神的なものであると説く」。（参考文献［Ⅸ］、⑨、P.116）。

これは精神分析の第二仮説である。この仮説は、おおざっぱにいえば、人間の心の大部分は動物次元の心―本能―によって規定されているということをいっている。[4] 動物は本能につきうごかされて生きる受動的存在である。それ故、この仮説に従うかぎり、人間は「デモニッシュな力」に翻弄されるだけで、それにたちむかう能動性はストレートには出てこない。

他方、動物と区別された、人間に固有の心の働きに目を移しても、フロイトは芸術の偉業や神秘的な創造性について精神分析は何も語れないといい、ついには、人間のなかに「完成への本能」が存在するという信仰を私は信じない、とまでいい切ってしまうのである。[5]

人間にとって、「デーモン」との闘争を通じての、「自我」の「自立（確立）」ということははたして可能なのであろうか。

そのこたえを得るために、フロイト自身が自己観察⇒自己分析から人間理解・把握を得ていたという事実にかんがみ、ここで、フロイト自身の精神生活に目を移してみることにしよう。

フロイトの生涯を通じて、フロイトをして行為へ駆りたてていた動機は、なんといっても、医師としての「治療愛」であろう。しかし、自分の「真理への愛」はそれ以上だとフロイトはいっている。フロイトの生涯はこの二つの愛にささげつくされたといっても過言ではない。それに不朽の名声への愛、経済的余裕や完全な独立への愛、旅行ができる楽しみ、ギリシャ、ローマ、エジプト等の古代遺物の収集の楽しみ……等がつけ加わる。ここには、たしかに「デモニッシュな力」に抗して、「自立」を志向する、能動的な「自我」が存在している。

かくして本稿の焦点はさらにしぼられる。フロイトの人間理解・把握にあって、動物次元の「自我」と区別された「人間的自我」とはなんであり、それはいかに形成され、その能動性⇒自立のエネルギーはどこから出てくるのかと。

本稿は「自我」の「自立（確立）」ということに焦点をあてて、人間の「心的人格」の構造の議論を中心とした、フロイトの人間本性の理解・把握を論ずることをテーマとするものである。

第１章「自然史的過程」と人間（心的人格）―「外界」⇒「本能」⇒「心的人格」―

フロイトは、マルクスと同じように、人間の問題を「自然史的過程（自然弁証法）」からとらえ返している。すなわち、人間の心のなかには、「物質的自然〈の歴史〉」⇒「生命的自然〈の歴史〉」⇒「人間的自然〈の歴史〉」が蓄積されているとみ、それを前提とした上で彼の「人間論」を展開

している。

フロイトの「人間論」の前提をなす、「外界⇒本能」の議論についてはすでに詳論しておいたが[6)]、以下、本稿の展開に関連するかぎりで、そのポイントをなすところを一瞥しておくことにしよう。

1.「外界」という激流にもまれる木葉

フロイトの「文明論」の、そしてその基礎をなす「人間論」の、そもそもの原初、究極の根源は「外界」という「大いなるX」である。フロイトの推論に従えば、物理学が無機界に仮定している「牽引」と「反撥」というアンビヴァレントな力（物理・科学的エネルギー）が「有機的生命世界」を生むと同時に、そこに於る「生の本能（エロス）」と「死の本能（サナトス）」というアンビヴァレントな力（生命のエネルギー）を生み出し、かくして「外界」に充満するこの物理・化学的⇒生命的エネルギーが心的エネルギーとなって、人間の「心的人格（心理装置）」に流入するとされている。「エス」の身体的なものへ向かっている末端は開いていて、そこから、「心的人格（心理装置）」は「生命エネルギー」を「心的エネルギー」としてとりこんでいる、とフロイトは推論しているのだ。**序.** の個所で示した精神分析の第二仮説は以上の推論の帰結である。

「外界（無機的物質世界）」の変動⇒「有機的生命世界」およびそれにともなう「生の本能」・「死の本能」の生成⇒人間の「心的人格」という図式、しかも、それをエネルギーの面からみて、人間の「心的人格」のなかには物理・科学的エネルギー⇒生命的エネルギー⇒心的エネルギーが充満しているという図式は極めて唯物論的である。しかし、フロイトの「人間論」⇒「文明論」にあっては、この図式が土台をなしている、ということを我々は見落してはならないのである。

フロイトは人間の「心的人格」というものは「外界」という激流のなかでもまれつづけながら成長をとげ、今なおもまれている木の葉の如き存在にすぎないとみていたのだ。

2. 人間の流儀に応じた「生⇒死」の経路

さらにフロイトの「精神分析学的思考」[7)]は「大いなるX」への接近をもとめて次のように推論をつづける。「外界」の変動は「生命体」に対し外的強制として作用し、それに適応すべく、「生命体」は進歩・発展を余儀なくさせられてきたと。

外的強制による「生命体」の進化・発展にともない、それぞれの「生命体」はそれぞれの発展段階に応じた「本能」―「生の本能」と「死の本能」とのアンビヴァレントなあり方―を形成し、そのような「本能」にせきたてられて、それぞれの「生命体」はそれぞれの流儀に応じた「生⇒死」の経路をたどろうとするようになる。つまり、それぞれの「生命体」をつきうごかすぞれぞれの「本能」はそれぞれの「生命体」をしてそれぞれのやり方で生き死んでいくことに固執せしめる。

人間といえども「本能」のこと保守的性格からまぬがれるものではない。人間もまた内なる「本能」につきうごかされて、人間的なやり方で生き⇒死ぬことだけを望んでいる。人間は自分では全くあずかり知らぬ、しかしたしかに「エス」に内在する、デモニッシュな力に翻弄されて人間の流

儀に応じた生を生き、死にむかっているのだ。人間をつきうごかすこのデモニッシュな反復強迫のなかから、人間に固有の「心的人格」の形成⇒文明の問題の根源が出現する。このあと詳論する「自我」の形成、なかんずく、「超自我」の「自我」からの分離の問題がそれである。

３.「生の本能」と「死の本能」の混合と解離

フロイトは「精神分析学的思考」のもとに、さらに推論をつづけている。「心的人格（心理装置）」に充満している本能（心的エネルギー）は「身体（細胞や器官）」に充満している本能（生命エネルギー）をエスからとりこんだものであり、人間を内側からつき動かしている身体的⇒心的エネルギー（本能）は、「生の本能（のエネルギーたるリビドー）」と「死の本能（のエネルギーたるモルティド）」との混合と解離のなかにあると。

ちなみに、フロイトのいう「生の本能」というのは生命保持の目標に向かって生の綜合―より多く生きようとする実体を集めてより大きな単位にまとめること―をめざすエネルギーであり、「死の本能」というのは生きているものを無機的状態に還元しようとするエネルギーである。

「生の本能」と「死の本能」との混合・解離という推論⇒仮説はサディズム（解離の典型）や癲癇発作（解離の産物あるいはその徴候）や初期段階からの性器期への進歩および性器期からサディズム的肛門期への退行といった現象を解明するのに有効なだけではない。さらにこの推理・仮説は、次の２点に於て、フロイトの「人間論」⇒「文明論」の土台をなしていると考えられる。すなわち、①. 両本能の混合・合一にある「移動エネルギー Verschiebungs energie」こそが「自我」の統一性つまり「自我」の自立を確立するために奉仕するものであるという点[8)]と②. 本来沈黙状態にある「死の本能」は「生の本能」との混合・解離のなかで「自己破壊の傾向を防ぐためには他の物や他の人を破壊しないと気が済まなくなる」（参考文献［Ⅷ］、1、P.472）というかたちで「攻撃・破壊本能」として現象するという点である。

この推論⇒仮説をもってフロイトは「性善説」の信仰は誤った錯覚の一つであるという経験的判断を補強したのである。

「『性善説』の信仰は、人間が現実には互いに傷つけ合っているにすぎないのに、それによって生活を美化し安易にできようかと期待するあの誤った錯覚の一つである。」（参考文献［Ⅷ］、１、P.470）。

この自他への攻撃をもたらす両本能の結合の解離⇒「攻撃・破壊本能」の解放は、次に論ずる、「昇華」あるいは「同一視」の作業の帰結である。「自我」あるいは「超自我」による「エス」支配は、常に、「攻撃・破壊本能」の解放と結びついているのだ。

４.「自由に動き得るエネルギー」の「拘束されたエネルギー」への転化

最後に人間の能動性の問題にかかわる、フロイト「本能論」上の推論・仮説を示すことにしよう。「エス」のなかでは、「自由に動き得る可動エネルギー」が「対象リビドー」として沸騰している。「自

我」がおこなう「昇華」あるいは「同一視」という作業はリビドーという性的エネルギーを脱性化させ、「拘束されたエネルギー」さらには「静止せる備給エネルギー」へと転化させる。その結果、沈澱物が生じ「性格」あるいはその最初期の金色塔たる「超自我」が形成される。

フロイトの「人間論」（人間理解・把握）が単純な唯物論――「物質⇒生命⇒人間」といった人間の受動的な見方――と決定的に分かれるのは、正に、この転化の理論にある。「自我」の自立は脱性化したエネルギーによって可能になり、「超自我」は直接に、あるいは「自我」を介して「エス」の支配にたちむかう。人間の能動性のひとつは、「同一視」にもとづく、この「自由に動き得る可動エネルギー」の「拘束されたエネルギー」への転化（「超自我（性格）」の形成）から生れてくるのだ。このことは本稿の以下の展開で詳論されるであろう。

第２章　「自我」と、「エス」及び「外界」

「外界」と「内界（エス）」に荒ぶる「デーモン（デモニッシュな力）」に翻弄されながら、それと闘い、「自立」をかちとっていく「心的人格」の主座は「自我」である。「自我」とは何であり、いかに形成され、いかなる役割を果たしながら、能動性⇒「自立」をかちとっていくことができるのか。まずここから論ずることにしよう。

１．「外界」対「内界」

そもそもの初めは「大いなるＸ」としての「外界」である。「外界」が「生の本能」と「死の本能」につき動かされる「生命体」を生み、さらに、「生命体」の「内界」たる「心的装置」を形成した。「生命体」の「内界」たる「心的装置」の基層をなすもの（心的領域の全体）が「エス」である。

「生命体」は誕生するやその「内界」で、「外界」とは区別されたエネルギー活動を行い、荒ぶる「外界」に翻弄されながらも、「内界」に充満する保守的な本能につきうごかされて、自己の流儀で自己の「生⇒死」の経路をまもろうとする。つまり「生命体」の「内界」―「身体」⇒「心的装置」―に充満するエネルギー（本能）が、荒ぶる「外界」からの強制力（エネルギー）に抗（適合）して、個と種の「自己保存」をはかろうと――個と種の「生⇒死」の経路をまもろうと――する。「生命体」の「自我」の形成は、端的にいえば、この「外界」と「内界（エス）」との対抗関係のなかで、さらにえば、「生命体」が「内界（エス）」の「自己保存」の要求にこたえるべく「外界」の強制に抗（適合）していくなかで、なされるのである。

２．「エス」

空間的な広がりを持ち、生の要求に応じて合目的的に組織化され発達していく、「内界（心的装置）」の、基層をなす心的領域の全体が「エス」である。まずは「エス」が主格なのである。Es treibt mich. 私は私の内なる、しかし、自分では全くあずかり知らぬ、「未知の統御しえない力」によっ

てつき動かされ、「生活させられている」。「エス」が主語であり主体であり、「私」はそれによって生かされる客体なのである。

「エス」については次のような極めてその本質をついた説明がある。「日本語では形式的にはエスに対応する言語はありませんが、内容的にいえば、エスに対応するものは『気』と考えておいてよいかと思います。……エスはまさにこうした気の所在を意味します」。（参考文献［XI］、P227）。

「心的人格（心的装置）」の基層――心的領域の全体――をなす「エス」の第１の特性は「自我無縁性」ということにある。「自我」の抑圧のもとにある「無意識」は「自我」のあずかり知らぬものであるとはいえ「自我」に縁ぶかいものである。「無意識」が占める心的領域は「エス」のほんの一領域にすぎない。「自我」には全くあずかり知らぬ、しかも「自我」とは全く縁もゆかりもない、そういった心的領域が「エス」であり、それは「生命体（人間）」の「内界」に無限に広がっているのである。

「エス」の第２の特性は、そこには、心的エネルギー――「性の本能（リビドー）」と「死の本能（モルティド）」との混合・解離にあるエネルギー――が充満しているということ、さらにいえば、「死の本能」は沈黙し、「生の本能」のエネルギーたる、自由に動きうる可動エネルギーとしての「対象リビドー」が充満しているということである。「エス」の末端は「身体」に延びていて、「エス」はそこから「身体」の細胞や器関に内在する「生命エネルギー」を「心的エネルギー」として、とりこんでいるのだ。

「エス」の第３の特性は、そこに充満するエネルギーが個と種の「自己保存」――自分の流儀で「生⇒死」の経路を経ようとすること――に固執して、「涅槃原則」にもとづく「快楽原則」にもっぱら従って作用しているということである。

以上のように、フロイトに従えば、「人間」は、他の「生命体」同様、「エス」という自分の全くあずかり知らぬ心的領域をもち、そこに充満している、わけのわからない、「デモニッシュな力（本能・エネルギー）」につき動かされ、翻弄されている存在なのである。

３．「自我」、その形成、その役割

「生命体（人間）」には生得的に「自我」が備わっているのか。それとも「生命体（人間）」の「自我」は生誕後の経験のなかで形成されていくのか。「生命体（人間）」に生得的な「自我」―「エス」＝「自我」にある「原初自我」―を想定できるとしても、あるいは、想定しなければならないとしても、「生命体（人間）」の生誕時には、その心的領域のすべては「エス」が独占し、誕生後の「経験」のなかで、「エス」の一領域にその変形としての「自我」が形成されていく、というのがフロイトの主要論理である。「最初すべてのものがエスであった。自我は外界からの絶えざる影響によってエスの中から発達してきたのである」（参考文献［IX］、⑨、P.172）。これがフロイトの「精神分析的学思考」にもとづく仮説である。以下、フロイトの「自我」に関する仮説をさらに掘り下げてみよう。

「自我」はその核心をなす「知覚（体系）」から由来している。「生命体」が感受する「知覚（体系）」には「外部（外界）」からの刺激に起源をもつもの（「外部知覚」）と「内界（エスの本能）」からの刺激に起源をもつもの（「内部知覚」）との質を異にする二つのものがある。「生命体（人間）」はこの「外部」と「内部」の二つの「知覚（体系）」から「意識（体系）」を、さらに、それにもとづいて「自我」を形成していく[9)]。

「生命体」は「外部刺激（危険信号）」についてはそれを知覚し逃走することができるが「内部からの刺激」についてはそれを知覚しても逃走することができない。駆りたてられるだけだ。「生命体」は「エス」の本能に駆りたてられて、「エス」の中で拘束されずに支配している「快感原則」に従って、「外界」にたちむかう。しかし「外界」の力は圧倒的である。たちまち「危険信号」を知覚して逃走する。逃走しきれない場合には、さらに、外皮をまとい、感覚諸器官を発達させ、「知覚体系」を形成・高度化させ、「外界」に適合しようとする。この過程で「エス」のなかに、変化がおき、「エス」の内部にその一部として、「エス」からの分化としての「知覚・意識体系」⇒「自我」が形成される。

「自我」とは「外界」の直接の影響によって変化する「エス」の一部分なのである。

かくして形成された「自我」は運動への通路（筋肉系）を支配し、よりいっそう強力になった力をもって「内界」からの要求に従って、「外界」の力にたちむかっていく。

ここに「自我」の役割が明白になる。「自我」の役割とは、「外界」の力・影響を知覚しつつ、「エス」の要求・意図をより有効に発揮させるように努力すること、さらにいえば、「エス」の「快感原則」の立場に自己の「現実原則」を置こうと努力することこれである。

「エス」の「快感原則」の「自我」による「現実原則」への置き換え――「一次過程」から「二次過程」へ――。ここに「自我」の能動性の根本がある。しかし「動物的自我」にはこの能動性は十全ではない。「自我」の強い能動性は人間に固有のものである。

４．人間的「自我」の形成

人間の「自我」もまた「動物的自我」を根幹にすえるが、その上に、人間は「動物的自我」とは区別された、人間に固有の「自我」を形成している。

フロイトに従えば人間の「心的人格」の主座を占める「（人間的）自我」は「聴覚帽」をかぶっていて、それは「自我」の上に斜めにのっているという。このことは「（人間的）自我」は主として、「聴覚⇒言語」に由来するのだ、ということを物語っている。

言語は本来聴覚から生じたもので、言語表象は聞かれた言語の記憶の残存物である。この言語表象＝記憶の残存物は「知覚・意識体系」に直接結びつく諸体系の中にふくまれると仮説することによって、はじめて、「（人間的）自我」について語れるとして、フロイトは次のようにいっている。

> 「記憶の残存物をわれわれは、知覚―意識　W-Bw 体系に直接に結びつく諸体系の中にふくめようと思う。そうすれば、記憶の残存物がもっている備給は、この知覚―意識体系の要素へと、内部から容易にひき継がれる可能性がある。」（参考文献［V］、6、P.270）。

ここで「知覚・意識体系」に直接に結びつく諸体系とは、主として、「前意識の体系」のことをさしている。「前意識の体系」はそこに含まれる言語表象＝記憶の残存物によってはじめて存立し、前意識的表象(思考)は言語表象＝記憶の残存物との結合が加わってはじめて可能になる。何故なら、言語表象＝記憶の残象物はかつては知覚であったのであり、それ故それはふたたび意識されることがあるからだ。言語表象の仲介によって、はじめて、内部の思考過程は知覚になる、つまり、記憶痕跡は言語系との結合によってはじめて意識化され得る、のである。

以上のように、「(人間的) 自我」もまたその核心である「知覚体系」に由来する点では他の「動物的自我」と共通するが、「人間的自我」には記憶の残存物に依存している「前意識」が主要構成要素として含まれているという点で、決定的に質を異にしているのである。

「(人間的) 自我」は「前意識」という内部的思考過程――言語による記憶の保存とその再生――の上に立って作用する。このことは、別言すれば、「(人間的) 自我」は「感覚」をもとに「分別」として「悟性的」にあるいは「理性的」に作用するということに他ならない。この「(人間的) 自我」の作用こそ、人間(「心的人格」)の能動性なのだ。この能動性において「自我」は「エス」の要求と「外界」の脅威とを調整し、「エス」の「快感原則」を自己の「現実原則」に置き換えていくことができるのである。「自我」の自立の原点はそこにある。

このことは「自我」による「エス」の本能要求の鎮圧―「抑圧」―まで進むが、「抑圧」については**第４章**で論ずる。

第３章　「父親」殺し　―「高貴」なもの、「道徳的」なもの、「超個人的」なものの歴史的起源―

１.「唯物史観」との別れ　―「自我理想・超自我」の役割―

「自我」の土台をなす「前意識」的な言語の残存物が、人間の「心的過程」に、思考過程を挿入すること、さらに、運動性への通路を支配する「自我」が思考作業という経験の記憶残滓を利用することによって「エス」の要求と「外界」の圧力を能動的に調和していること、そこに「人間的自我」の能動性の根拠があることを**第２章**で論じた。しかしフロイトは人類の文明への発展をうながす、人間のより高尚なより高等な心の働きー「宗教」、「道徳」、「社会的感覚・感情」等を生む心の働きーの源泉を「自我」にではなくそこから分化したものであるがそれとは区分された、「自我理想・超自我」[10] にもとめている。フロイトはエディプス・コンプレクスとその解消⇒「自我理想・超自我」の形成に、人間の人間たるゆえんの最高のもの、人類をして文明発展に導く最大の動因をみているのである。

エディプス・コンプレクスは人間に固有の特質と思われるが、「それを精神分析の仮説は、氷河時代を通じて強制された文化への発展の遺産であるとみなした。したがって、超自我が自我から分化するのは偶然ではなく、その分化は個人および種属の発達のもっとも重要な特徴を代表している。」(参考文献［V］、⑥、P.281)。

このあとすぐ詳論するように、フロイトに従えば、「自我理想・超自我」は「世代から世代へと受け継がれてきた一切の不変的な価値の担い手」（参考文献［Ⅷ］、[1]、P.441）なのである。この「自我理想・超自我」という「因子」を過小評価しているとして、つまり、「自我理想・超自我」は「経済的諸関係」に左右されない強力な役割をえんじているのを見落としているとして、フロイトはいわゆる「唯物史観」を、その「本能論」に於ては「唯物史観」にあれほど接近していたにもかかわらず[11)]、次のように批判している。

「いわゆる唯物史観は、この因子を過小評価する点でたしかに誤ちを犯しているのです。唯物史観は人間の『イデオロギー』は可動的な経済的諸関係の所産ないしは上部構造にほかならないと言って、この因子を排除してしまいます。それは真理ではありますが、しかし恐らく真理の全体ではありますまい。人類は決して現在にばかり生きてはいないのです。超自我のイデオロギーの中には過去が、種族および民族の伝統が生き続けているのです。この伝統は現在の影響や新しい変化にはただ緩漫にしか譲歩しないのであり、伝統が超自我を通じて働き続けて行くかぎり、それは人間生活において経済関係に左右されない強力な役割を演じるのです。」（参考文献［Ⅷ］、[1]、P.441 ～ 2）。

「超自我のイデオロギーの中には過去が、種族および民族の伝統が生き続けている」とはどのような意味内容をもっているのであろうか、また、何故「伝統が超自我を通じて働き続けて行くかぎりそれは人間生活において経済関係に左右されない強力な役割を演じ」ているといえるのであろうか。このことはこの後の論述で明らかになる。以下「人間論」と「文明論」の結節点をなすこの言葉に焦点をあてて、エディプス・コンプレクスとその解消⇒「自我理想・超自我」の形成の歴史的起源、および、その継承について論じていくことにしよう。

２.「父親」殺し　―トーテムとタブー―

フロイトは文明の出発点にルソーのいう「自然状態」――「文明度ゼロの人間の動物状態」――に似た「原始社会状態」を仮説している。ただし、フロイトはあくまで「精神分析学的思考」の範囲内で仮説をたて、それをダーウィンのいわゆる「原始群族」として論じてはいるが。以下フロイトの「系統発生的人間論」を論ずることになるが、フロイトの「人間論」⇒「文明論」は系統発生と個体発生とを対応させているところに特徴があるから、以下に論ずる「父親殺し」――「エディプス・コンプレクスとその解消」――という人類史のエポックを画する出来事が、個体の歴史ではどのへんの成長段階に対応しているのか、まず、確認しておくことから始めることにしよう。

フロイトは「人間は五歳で性的に成熟する哺乳動物から進化したものである」ということから、人間の性生活は「二相性（二つの開始期）」を持ち、「このことは人間以外には知られていないことであり、また明らかに人間の発達にとって極めて重要な事実でもある」（参考文献［Ⅳ］、[9]、P.163）といっている。ちなみに、ここでいう人間に固有の「性生活の二相性」というのは５才の終りに頂点に達する早期幼児期の、規則正しい発達段階――第１期口唇期⇒第２期サディズム的肛門期⇒第３期男根期――（以上が第一相）を経て潜伏期（休止期）に入り、次いで、思春期の到来と共に、新に性生活が開始されて第４期である性器期（これが第二相）が始まるというものである。

以下に論ずる、「 文明 」の出発点を画する、人類史に於る「父親殺し」という歴史的事実は、個体の歴史に対応させると、性生活の「第一相」の終り、つまり男根期の終りに訪づれる「エディプス期」に対応している。人類は個体発生的の「エディプス期」に対応する段階で系統発生的に「父親殺し」という「エディプス期」をむかえていたのだ。

さてここで「文明」の出発点たる「原始社会状態 」――「原始群族」――に話をもどすことにしよう。

「原始群族の父は自由だった」。彼の「自我」はほとんどリビドー的に結合されておらず、自己以外の誰をも愛さず、彼の自我は対象にたいして、なんら余計なものを与えなかった。彼は「マナ」――「神秘的な力」、「動物磁気」――を所有する、強大で危険な同時に尊敬と羨望の念をおこさしめる人格として子供たちの前にたちあらわれた。「彼は、人類史のはじめには、ニーチェが未来に期待した超人であった」（参考文献［Ⅳ］、⑥、P.237）。フロイトはかく「原始群族の父」を仮説している。

彼は女という女をすべて独占し、さらに、ライバルとなる息子たちをすべてを群族から追放した。追放された息子たちは「男子結合体」をつくり、「ある日のこと、追放された兄弟たちは力を合わせて、父親を殺しその肉を食べてしまい、こうして父群にピリオドをうつにいたった」（参考文献［Ⅰ］、③、P.265）。

「父親殺し」という人類の記念すべき「犯罪行為」がおこなわれたのだ。この「父親殺し」という「犯罪行為」と同時に息子たちは「羨望と恐怖」をともなう模範であった父親を「食べてしまうという行為」（「一体化・同一化」）によって父親の偉大なもの（「マナ」）を自己の中にとりこんだ。エディプス・コンプレクスと、「同一視」によるその解消ということとが人類の歴史的規模に於てなされたのである。

他方子供たちは「自分たちの権力欲と性的要求の大きな障害となっている父親を憎んだのであるが、彼らはまたその父親を愛し讃美もしていた」（参考文献［Ⅰ］、③、P.266）。権力欲と性的欲求にかられて父親を殺したいと願望と父親と一体化しようという願望とが実現すると、彼らの心に、いままでおさえていた愛情が頭をもたげ、悔恨とそれに照応する罪意識が生じてきた。こうして子供たちは「事後服従」という心理状態の中で、父（その代替であるトーテム動物）の屠殺を許しがたいこととして自分の行為を撤回し、この行為の果実――「自由になった女たち」――を断念し、トーテミズムの二つのタブ――「トーテム動物〈父親の代替〉の愛護」と「近親性交の禁止」――をつくり出したのである[12]。

以上のごとき内容をもつ「父親殺し」というこの歴史的事件としての「犯罪行為」こそ人類の文明化――社会組織、道徳的制約、宗教など――の始源であるとして、フロイトは次のようにいっている。

「この犯罪行為から社会組織、道徳的制約、宗教など多くのものが始まったのである。」（参考文献［Ⅰ］、3、P.265）。

フロイトにあって「高貴」なもの、「道徳的」なもの、「超個人的」なものの歴史的起源は、以上のごとき、人類史的規模でおこなわれた「父親殺し」というエディプス・コンプレクスとその解消にありとされている。そして人類の「父親殺し」というこの歴史的経験が、以後、個体におけるエディプス・コンプレクスとその解消⇒「自我理想・超自我」の形成ということの、「遺伝因子」となって人類に受け継がれていくとされているのである。

しかし、はたして、歴史的経験が「遺伝」されるのであろうか。次にそのことを論じよう。

3.「遺伝」によって受け継がれたある重大な出来事の沈殿

「生命体」をつき動かす「本能」が、「遺伝」によって受け継がれた、「生命体」の過去の出来事（経験）の沈殿であるのとちょうど同じように、「人類史」のエポックを画する「父親殺し」――「エディプス・コンプレクスとその解消」――という重大な出来事（人類の経験）は「エス」のなかに沈殿し、「遺伝因子」として、人類に受け継がれていく。「経験は遺伝する」というラマルク説をおもわせるこの仮説が、フロイトの「人間論」⇒「文明論」の重要な要になっているのだ。

> 「自我の体験は一見すると、継承されないで失われていくように見える。しかし、もしその体験が、しばしば、充分な強度をもって、世代を追ってつづく多くの個人に繰りかえされるならば、それはいわばエスの体験にかわり、その印象は遺伝によって保存される。」（参考文献［V］、⑥、P.284）。

個人の「エス」のなかには、「古代の遺産」が、「系統発生的獲得物」が、人類の「過去の経験」が貯えられている。「遺伝性のエスは、その中に数えきれないほど多くの自我存在の残余をかくしている。」（参考文献［V］、⑥、P.284）。

「遺伝性のエス」のなかに貯えられた最も重要な沈殿物は人類の運命のなかにおこったかの「父親殺し」という経験である。「遺伝性のエス」のなかに貯えられているその人類史的経験が、個体の５才までの性生活の最初の開花期――「エディプス期」――にあらわれる。何故なら「この幼い年令ではトーテム的な考え方の本来の痕跡がすぐに再生するからである。」（参考文献［Ⅶ］、⑥、P.331）。

フロイトは人類の運命（系統発生）と個人の運命（個体発生）との接点を次の言葉で表現している。

> 「生物の法則と人間種属の運命がエスのうちにつくり、伝えたものは、自我理想の形成によってうけつがれ、自我の中で個人的に体験される。自我理想は、その形成の歴史によって、個人の中の系統発生的獲得物、古代の遺産ときわめてゆたかに結合している。」（参考文献［V］、⑥、P.282）。

「父親」殺しという「人間種属の運命」が「エス」のうちにつくり伝えたものは、個体の「自我理想」の形成によって受け継がれ、「自我の中で個人的に体験される」。個の「自我理想」は「系統発生的獲得物」ときわめて豊かに結合している。フロイトにあっては人間の個と類（の運命）は「自我理想・超自我」を媒体として結びついているのだ。

我々はいよいよ「自我理想・超自我」を論じなければならないところに到達した。

第４章　「超自我」　―文化・伝統の担い手―

１．「自我」による「抑圧」

「外界」を代表する「自我」がその「危険察知」その他から、「エス」の快感原則を「自我」の「現実原則」に置きかえようとしていることはすでに論じた。しかし、「自我」の能動性とその役割は個の成長過程の共に、さらに進展していくことになる。自立を可能にする「抑圧」がそれである。

それは個の成長過程に於てなされる、「同一視」にもとづく「性格」と呼ばれる領域の「自我」の中に於る形成によって可能になる。「同一視」⇒「性格」形成の過程で、「生の本能」のエネルギーたるリビドーは脱性化され、「自我」のエネルギーとなってあらわれる。この「性的でなくなった自我のエネルギーは、結合と統一への努力として、本性を明らかにし、自我が強くなるほど、この結合への強化はたえず増大する。」（参考文献［Ⅶ］、⑥、P.328）。

こうして「自我」への（脱性化した）心的エネルギーの配分が高まり、「自我」の自律的自立――結合・統一・総合――へ向う能動性は強化される。

「抑圧」は「自我のエネルギー」につき動かされて結合・統一・総合にむかう「自我」の能動性のなかでおこなわれている。

> 「自我は外界にたいする行動への道を支配するとともに、意識にいたる道をも支配し、抑圧にさいして二つの方向に力をふるう。つまり自我の力の表現は一面では衝動興奮そのものに、他の一面では衝動の表象に認められることになる。」（参考文献［Ⅶ］、⑥、P.326）。

自律を可能にする「自我の力（エネルギー）」による「抑圧」は「本能興奮そのもの」と「本能表象」との両方面に於てなされるが、「人間的自我」による「抑圧」の本質は「本能表象」の「抑圧」にある。「自我」がおこなうこの「抑圧」に、実は、「超自我」――「同一視」にもとづく最初の、決定的重要性をもって形成される「性格」――が大きくかかわっている。「抑圧」は「超自我」自体が、あるいは、「超自我」の委託を受けて「自我」がおこなうのだ。

> 「超自我を自我の中に仮定して以来、抑圧はこの超自我の仕業であり、超自我は自分で抑圧を遂行するか、あるいは超自我の委託を受けて、超自我に従順な自我がこれを遂行すると言うことができるのです。」（参考文献［Ⅷ］、①、P.443）。

２．「理想自我（Idealich）」と「自我理想（Ichideal）」

フロイトは「抑圧」の主体である「超自我」に「自己観察」と「良心（裁きと懲罰）」と「理想機能」という三つの役割をふりあてているが、「理想機能」と「良心（裁きと懲罰）の機能」とは厳密にいえば質を異にするものである。「理想機能」が先で、そのあと、「良心（裁きと懲罰）の機能」が成立するのだ。

それ故、まず、「超自我」の「理想機能」から論ずることにしよう。

フロイトは「ナルシシズム入門」で次のようなことをいっている。「抑圧」は自我から発するがもっと厳密にいえば自我の自尊から発する、自我の側からみれば理想形成が「抑圧」の条件であると思

われると。そしてその条件を満たしているものが「理想自我」なのである。フロイトは「理想自我」こそ「抑圧」の究極の源泉とみていたと思われるのだ。

それではフロイトにあって「理想」――「高貴」なもの、「道徳的」なもの、「超個人的」なもの――へ向って「抑圧」をなす、「理想自我」とな何なのであろうか。

「対象備給」と「同一視」とが区別される以前にある「原初自我」――「『エス』＝『自我』の状態にある自我」――の、それ故自分自身が自己の愛と理想になっている、乳幼児期のいわば「母子一体感」的完全性。フロイトはそれを「幼時には現実の自我が享受していた自己愛」、「幼児のナルシズムの完全性」の変位したものという言葉で説明している[13)]。

成長の過程で、つまり、「エス」と「自我」の乗離の過程で、このような「完全性」を享受することができなくなることは必定である。何故なら、「エス」の一領域に「自我」が形成され、「対象備給」と「同一視」の区別が始まるからだ。そこに「理想自我」の代替として登場するのが「自我理想」である。「自我理想」というのは自分自身が自己の理想であった幼児の、失われた（一次的）ナルシシズムの代理物なのだ。

「自我理想」の背後には個人の最初のもっとも重要な同一視が隠されている。幼児期の（父）親との同一視である。幼児は「理想自我」の完全性の代替に、（父）親を「自我理想」として自分自身のうちにとりこんだのである。

> 「われわれは、幼い子供のころに、この、より高等な本質を知り、それに感嘆し畏怖し、のちになってそれをわれわれ自身のうちに取りいれたのである。」（参考文献［V］、⑥、P.282）。

フロイトはこの「理想自我」⇒「自我理想」に人間の「より高等な本質」、「抑制をひきおこす動因」、「自我の中の道徳的美的傾向」、「高貴なもの、道徳的なもの、超個人的なもの」の源泉をみていたのである。

3．「超自我」形成の二つの要因　―生物学的要因と種族（系統）発生的要因―

「超自我」の形成は、人間の特質である、生物学的要因と種族（系統）発生的要因との二要因によってなされる。

生物学的要因というのは、人間が他の動物に比較して、未成熟のままで生まれてくるという特質に由来する要因である。人間は早期に生まれてくるが故に、無力でその間両親に依存せざるをえない。この幼児の無力さとそれ故の幼児的依存の強さ・長さが、すぐこのあと論ずるように、親との同一視⇒「超自我」という沈殿物の形成へと導くのである。

> 「長い幼児期を通して成長してゆく人間は、その期間中両親に依存して生きているが、この幼児期の両親への依存性は、この時期の沈殿物として、彼の自我の中に、両親の影響が継続される一つの特別な『場』を形成する。この『場』は『超自我』Uber-ich と呼ばれる。」（参考文献［Ⅸ］、9、P.158）

種族（系統）発生的要因というのは、人間の運命のなかでおこった「父親殺し」――「エディプ

ス・コンプレックスとその解消」――にかかわる、すでに詳論しておいた歴史的経験に由来する要因であり、これのみが人間に固有なものである。フロイトに従えば、人間の運命のなかでおこったこの歴史的経験は「遺伝性のエス」のなかに貯えられ、それが幼児期に復活するとされている。「自我」が「超自我」を「エス」から作る時、「自我」は「エス」に貯えられた過去の経験を、そこにつめこまれているたくさんの「自画像」を出現させ復活させている。こうして「超自我」は過去の経験を未来に伝える伝統と文化の担い手という役割をになっているのである。

以下、「超自我」の形成・特質・役割について論じておくことにしよう。

4．エディプス・コンプレクスとその解消

「超自我」はエディプス・コンプレクスの相続者であり、その解消の後にはじめて現われるものである。したがって我々は、まず、エディプス・コンプレクスとその解消の問題から論じなければならない。

フロイトのエディプス・コンプレクスの議論は複雑を極めている。まず男性と女性とのエディプス・コンプレクスの質の差がある。フロイトはエディプス・コンプレクス⇒「超自我」の形成にもとづく、男女間の精神発達がいかに質を異にするかを次の言葉で表現している。

> 「ここでフェミニストの男女平等の権利の要求は話にならない。男女の形態学上の差異は、精神的な発達に差異をもたらさずにはおかない。ナポレオンの言葉をもじっていえば、解剖学上の差異は運命なのである。」（参考文献［Ⅵ］、⑥、P.314）。

その上さらに、男性に女性にも、それぞれに、両性的素質――男性的要素と女性的要素――が内在しているという事情がつけ加わる。それ故、複雑を極めるのだ。

それをすべて論ずることは省略して、ここでは、最も単純化して、男児の最も典型的な例だけを論ずることにしたい。

男児が、いちはやく「同一視」のなかで父親を「自我理想」としてとりこんでいるということはすでに論じた。それと同時に男児には依存型の対象選択――生存欲動の性欲動への転化――の原型を示しつつ、母親に対するリビドーの対象備給が始まる。その結果、母への性的願望が強くなり、逆に父親をこの願望の妨害者とみなし、父を除外したいという願望が生じる。こうして男児の心には「自我理想」に発する父親のようになりたいという願望（尊敬）と父親を除外したいという願望（憎しみ）のアンビヴァレンツが存在することになる。「この父に対するアンビヴァレントな態度と母を単なる愛情の対象として得ようとする努力が、男児のもつ単純な積極的エディプス・コンプレクスの内容になるのである。」（参考文献［Ⅴ］、⑥、P.279）。

この「エディプス・コンプレクスは、成就させることができず、もともと叶えられない願望であることがわかることによって消滅してゆく」（参考文献［Ⅵ］、⑥、P.310）。消滅のそもそもの始まりは、力が弱く親への依存状態にある幼児の「危険の察知」⇒「不安信号」の発生である。ここで「危険」とは「自我」が「外界」あるいは「内界」から受ける脅威の機会をいう。いまだ力の弱

い状態にいる幼児の「自我」は自己の内なるリビドー――エディプス・コンプレクス――につき従った場合におこる外的「危険」を察知する。男児の場合には典型的には「去勢」という「危険」⇒「不安」である。女児の場合には典型的には「もう可愛がってもらえない」という「愛情喪失」の「危険」⇒「不安」である。エディプス・コンプレクスのままにつきすすめば、親から見捨てられるか去勢されるのである。幼児はこの「危険」を察知するのである。

この幼児の「自我」の「危険察知」⇒「不安信号」は「エス」の快・不快の自動装置を呼び起す。そして「自我」の「危険察知」によって呼び起こされ、「エス」のなかで動き出した「快感原則」という自動装置が、「危険」な本能の動き――エディプス・コンプレクス――を「抑圧」するのである。

「抑圧」されたエディプス・コンプレクスは消滅しないで「無意識」となって「エス」のなかに存在しつづける。それは「神経症的不安」や「神経症」そのものをひきおこすことがある。「エス」のなかからエディプス・コンプレクスが破壊され消滅するのは、幼児の親――父親または母親――との「同一視」によってである。その時、幼児の「自我」は変化し、幼児の「自我」の一領域に「超自我」が形成され、人間の性生活の「第一相」が終りをつげるのである。

5.「超自我」とその攻撃性

エディプス・コンプレクスの解消に導く父親または母親との幼児の「同一視」はその「自我」の中に沈殿をもららす。この沈殿によって変化した「自我」の一部分が「超自我」であり、それは「内界（エス）」の代表としてたちあらわれ、「自我」の他の内容に対立することになる。「超自我」は親の権威が「自我」のなかに取りこまれたものであるから、親の厳しさをそっくりそのまま受け継ぎ、「自我理想」からはずれぬよう「自我」を監視し、はずれた場合には「良心」として「自我」を裁き、懲罰を与える。

フロイトに従えば、「同一視」は「（対象）リビドー」の脱性化、昇華の性格をもっており、その際には混合・結合状態にあった本能の解離がおき、混合・結合を支えていたエロス的部分は拘束力を失い、そのため、「死の本能」に源をもつ「攻撃・破壊本能」が解放されることになる。そのため「超自我」の形成と共に、そこにはかなりの量の「攻撃・破壊本能」が固定化される。「超自我」はそこに固定化された「攻撃・破壊本能」に発する「攻撃・破壊性」をもって、「自我」に厳格で残忍な命令を与え、「デモニッシュな力」をもって「自我」を翻弄する。その命令に対して「自我」はそれを至上のものとしてうけとり、子供が親の命令に従うように、生涯従いつづけるのである。「超自我」は「自我」に対しそれを支配する能力を生涯にわたって保持するのだ。

> 「超自我は、かつての自我の弱体と依存性の記念碑であり、成熟した自我にたいしてもその支配をつづける。子供がその両親にしたがうように強制されているように、自我はその超自我の至上命令に服従するのである。」（参考文献［V］、⑥、P.291）。

「超自我」は「エス」の最初の対象備給、つまり、エディプス・コンプレクスに由来している。

このことは「超自我」にとって、さらに大きな意味を有している。

最後にそのことについて論じよう。

6．「文化的過去」の担い手　―「種族的素質」・「文化・伝統」の継承―

「エス」のなかには人類の過去、歴史的経験が、「種族的素質」あるいは「文化・伝統」となって沈殿し、貯えられている。子供が新しく経験するものの多くは原始時代の系統発生的な体験の反復であるから、「超自我」は幼児期の数年間のあいだに幼児が追体験しなければならない「 文化的過去 」をあらわしている。幼児期に形成される「 超自我」は、それ故、直接的には両親の「超自我」を、さらにはそれを通じての、彼の時代の「傾向や要求」――「時代精神」――を継承するものであるが、それはもとをただせば、「エスの系統発生的獲得に関係づけられ、エスのうちに残渣をのこした過去の自我形成の再現とみなされる」（参考文献［V］、⑥、P.291）のである。「自我」は「超自我」の助けをかりて、「エス」の中に貯えられている過去の経験――「種族的素質」や「文化・伝統」――をくみとっているのだ。

こうして「超自我」は、直接的には、両親の「超自我」⇒「社会の傾向や要求（時代的超自我としての時代精神）」の、根源的には、「エス」の中に貯えられている「種族的素質」や「文化・伝統」の、再現として個体に現象し、親から子へと、代々、継承されていく。このように「超自我は、エスと外界の間に一種の媒介者の地位を占め、自らの中に現在と過去の諸影響を統合する」（参考文献［Ⅸ］、⑨、P.209）役割をになっているのである。

結び．「自我」の自立　―三様のデーモン―

人間の人間らしい生活のあり方は人間の「心（人的人格）」の作用に源泉をもつものであり、人間の「心的人格」の構造のなかで主座を占めるのは「自我」である。「生の本能（エロス）」につき動かされて「自我」は自立――結合・統一・総合――を志向する。主座を占める「自我」が自立をかちとった時、「心的人格」は安定し、人間の人間的生活は統一と調和のうちに創造的になる。しかし、「自我」はその由来が「無機質」⇒「有機体」⇒「内界（エス）」⇒「エス」の変形⇒「自我」の形成という論理にあることから、「外界」や「エス」に対しては微弱で無力な存在としてたちあらわれる。しかも「自我」はそこから分化した「超自我」にも攻撃されさえしている。「自我」は「外界」、「エス」、「超自我」という三様のデモニッシュな力をふるう暴君（デーモン）に翻弄されて、しかも、微弱・無力ながらもそれらにたちむかい、それらと折り合いをつけて自立を志向し、そのなかで自らを強化しているのである。

「自我」にとって「外界」は現実の力の場である。そこには「自然」の力だけだけではなく、個としての、あるいは、集団としての「人間」の力が満ちあふれている。「自我」は現実の力に発する「外界」の危険を察知し、「（現実）不安」を発生させられることがある。しかし「自我」は「外

界」というデーモンにたちむかい、その注文と要求にこたえ、人間（心的人格）がそれに適合できるようにする役割を負っている。そもそも「自我」の起源――「エス」からの分化――そのものが「外界」への適合をめざすことに発したのであり、知覚体系の諸経験により、「自我」はその適合の過程で、大きく強くなってきたし、また、なっていくものなのである。

「エス」というデーモンは「生命の歴史」に起源をもつ、デモニッシュな諸本能の貯蔵庫である。「自我」は「エス」の本能要求に、外界の代表者としてその直接性を鎮圧しようとたちむかい、「エス」の「快感原則」を自らの「現実原則」に置き換えよう試み、そうするなかで「エス」の注文と要求に上手にこたえようとする。それだけではない。「自我」は「エス」の邪悪な本能要求には「超自我」の指令を受けてそれを「抑圧」しようとさえ試みる。フロイトはいう。「自我に課せられる最も過酷な要求はおそらくエスの本能要求の鎮圧であろう」（参考文献［Ⅸ］、⑨、P.179）と。「自我」に発生する「神経症的不安」は「エス」の本能要求の強さに由来する。さらに「エス」の（邪悪にして）強烈な本能要求（願望）は「超自我」⇒「自我」の「抑圧」に対して「神経症の症状形成」をもってこたえることがある。「自我」は「エス」というデーモンにたちむかいそれをなだめすかしながらその注文と要求にこたえ、それと折り合いをつけていかねばならないのである。

「自我」をいためつけるデーモンは「外界」と「エス」だけではない。「自我」の「エス」支配に力を貸していた「超自我」も「自我」にさまざまな注文と要求をつきつけ、「自我」がその指令に従わぬ時は、そこに固定化されている「攻撃本能」をもって「自我」を厳しく攻撃してくる。「自我」に発生する「良心の不安」は「超自我」の攻撃性に由来する。

「精神病」はこれら「デーモン」との闘争にやぶれ、「自我」が自立――統合・統一・総合――に失敗した時におこる心の病である。

「外界」、「エス」、「超自我」という三様のデーモンの三様の注文と要求に自己の任務を果すべくこたえ、エネルギーを支出していると、その度がすぎた場合には大量のエネルギーを失い、その結果、「自我」は自己の任務を果すことができないような麻痺状態に陥ることがある。「自我」は窮地に陥るのだ。そこに、さらに、「エス」と「超自我」という「内界」からの強力な圧力が加わると、「自我」の組織は破壊され、「外界」の代表者という最も重要な自己の任務を果せなくなる。「自我」は「外界」の現実から遊離していく。「自我が外界の現実から遊離すれば、自我の内界の影響のもとに精神病に陥るのである。」（参考文献［Ⅸ］、⑨、P.179）。

人間存在の根底に「おそれとおののき」が存在するのは、以上論じてきたように、人間の「心的人格」の主座にある「自我」が三様のデーモンによって脅かされているからである。その「おそれとおののき」の行末には、「神経症」と「精神病」という「心の病」が待っている。人間が「不安」をかかえる存在であるかぎり、「被病者」と「健常者」の境はないのである。

しかし、人間という存在の究極の「おそれとおののき」の源泉は「超自我」というデーモンに発するものである。「外界」対「内界」、「現実」対「心理」という根源的対立を背負って、「外界」の代表者である「自我」に「超自我」は「内界（エス）」の代理人として襲いかかってくる。

「自我」に対し「超自我」は「内界（エス）」の代理人として「自我」が進みべき道――理念・目標――を指し示す。「超自我」というのは幼時の、依存状態にある、弱き、よるべきなき思いのなかにある「自我」が、直接的には両親から、根源的には人類の経験――文化・伝統――から「自我理想」（「理念・目標」）として自己の「内界」にとりこんだものである。それ故、「超自我」は安心と安全を約束してくれる救いの源、それなくしては生きられない絶対的な力として「自我」に作用する。つまり「超自我」というのは、自分一人では生きられない、それどころか一人でいること自体がこわくてたまらない「よるべなき存在」が保護と救済を求めて、自分の「内界」にとりこんだ、保護と救済を約束してくれる、親の力であり神の力であり、運命の力なのだ。「超自我」が指示する道――理念・目標――に従うかぎり、「超自我（親、神、運命）」に愛され、それからはずれると罰せられ、あらゆる保護する力から見捨てられ、殺されると思う。「自我」にとって生きるとは「超自我」に愛されるということと同じなのだ。

「自我にとって生きるということは愛されるということ、エスの代表者として現われる超自我によって愛されるということとおなじ意味である。」（参考文献［Ⅴ］、6、P.299）。

「自我」に発生する「死の不安」という究極の不安は、以上のごとき、「超自我」というデーモンの脅威に由来するものなのだ。

しかし、いうまでもなく、「超自我」の脅威におびやかされているかぎり、「自我」の自立はない。「自我」の自立のためには、幼時に、その幼き「自我」の中に形成された「超自我」をあらためて対象化し、意識化し、折り合いをつけ、「自我」が納得する「自我理想」を「自我」のなかに再建することによって「自我」を強化するより他に方法はないのである。

「自我」の自立は「外界」と「エス」と「超自我」という三様の「大いなるX（デーモン）」と闘いかつそれに仕えながら、そのなかで、「自我」を強め、「自我」を「超自我」から独立させ、その知覚領域を拡大して自我の組織を完成し、その結果、「自我」が「エス」の諸部分を獲得し、「自我」の領域を拡大していくなかで達成される。

フロイトの精神分析療法の意図も、「自我」の自立という、正にこの一点をめざすものであった。それ故フロイトは次のようにいうのだ。

「精神分析療法の意図は、自我を強め、自我を超自我からさらに独立させ、自我の知覚領域を拡大し、自我の組織を完成し、その結果自我がエスの新しい諸部分を獲得できるようにするということにあるのです。かつてエスであったところを自我にしなければならないのです。」（参考文献［Ⅷ］、1、P.451～2）

フロイトの「文明論」は、「生の本能（エロス）」と「死の本能（サナトス）」との角逐と共働のなかで、「生の本能（エロス）」につきうごされて「自立」――結合・統一・総合――にむかう「自我」と、それをめぐる「外界」、「エス」、「超自我」という三様のデーモンとの関係を土台として展開されることになる。

（いいおか　ひでお・高崎経済大学経済学部名誉教授）

（注）

（１）しかしその「人間論」を論ずるためには、まず、その「本能論」を論じなければならない。筆者はすでにそれを論じておいた。参考文献［XII］を参照のこと。

（２）参考文献［X］、P.457。

（３）「大いなるX」については参考文献［XII］の序のところで論じておいた。「大いなるX」であるが故に、デモニッシュであるのだ。

（４）フロイトは動物に「自我」の存在を認め、さらには、ある種の動物に、「超自我」の存在すら認め、「動物心理（学）」の領域の存在を示唆している。「人間の心理」の大部分はチンパンジー、ゴリラの「動物の心理」に類似しているとみているのである。

「自我とエスとの区別をわれわれは、原始人だけではなく、もっと多くの単純な生物にもみとめなければならない。それは外界の影響の必然的な表現だからである。」（参考文献［V］、⑥、P.284）。

「この精神装置の一般的図式を、精神的に人間に近い高等動物にも当てはめることができる。超自我は動物によっても、人間の場合のように、長い幼児的依存の時代がある場合には必ず認められ、同時に自我とエスの区別が必然的に認められるのである。ここに触れた動物心理学は非常に興味深い問題であるが、まだ問題として着手されるには至っていない。」（参考文献［IX］、⑨、P.158～9）。

（５）「われわれの多くのものにとっては、精神的活動と倫理的昇華の現在の段階へと人間を引き上げ、さらに超人にまで発展することを約束するはずの完成への衝動が、人間自身の中にあるという信仰を断念することは困難であろう。しかし私は、このような内的な行動を信じないし、このような快い幻想をまもる手段を知らない。」（参考文献［III］、⑥、P.176～7）。

（６）以下、第１章の１．から４．の議論はすでに詳論しておいた。詳しくは参考文献［XII］を参照のこと。

（７）「精神分析学的思考」の意味内容については参考文献［XII］の序の個所を参照のこと。

（８）「もしこの移動エネルギー Verschiebungs energie が、非性化したりリビドーであるならば、これもまた昇華されたということができよう。なぜならば、この移動エネルギーは、統合し結合させようとするエロスの主目的をつねにかたくまもり、自我の特徴であるあの統一性を――あるいはそれをめざすのが自我の特徴である――確立するために奉仕するからである。われわれが広義の思考過程をこの移動のうちにふくめるなら、おそらく思考作業もまた、エロス的な衝動力を昇華することによって獲得されるのにちがいない。」（参考文献［V］、⑥、P.289）。

（９）「自我」の本質は「外部知覚」と「内部知覚」の統一である。それは外部および内部の知覚が同時に生ずることができる、自分の「身体」で何よりも経験できる。「自我」は何よりも「身体感覚」にもとづく「身体自我」なのである。

（10）フロイトは最終的には「自我理想」を「超自我」のなかに含めている。しかし、フロイトはその主著「自我とエス」に於てすら、「自我理想」と「超自我」とを使いわけている。両者は質を異にするところがあるのだ。（本稿では第４章で、両者の質の差を論じておいた。）それ故、「自我理想・超自我」といういい方をあえてした。

（11）フロイトの「本能論」の、マルクスとの類似については参考文献［XII］、第１章を参照のこと。

（12）以上の論述については参考文献［I］、③、P.266～7を参照のこと。

（13）以上の論述については参考文献［II］、⑤、P.125～6を参照のこと。

参考（引用）文献

〔I〕フロイト（1913）「トーテムとタブー」『フロイト著作集③』人文書院

〔II〕フロイト（1914）「ナルシシズム入門」『フロイト著作集⑤』人文書院

〔III〕フロイト（1920）「快感原則の彼岸」『フロイト著作集⑥』人文書院

〔IV〕フロイト（1921）「集団心理学と自我の分析」『フロイト著作集⑥』人文書院

〔V〕フロイト（1923）「自我とエス」『フロイト著作集⑥』人文書院

〔VI〕フロイト（1924）「エディプス・コンプレックスの消滅」『フロイト著作集⑥』人文書院

〔VII〕フロイト（1926）「制止、症状、不安」『フロイト著作集⑥』人文書院

〔VIII〕フロイト（1933）「精神分析入門（続）」『フロイト著作集①』人文書院

〔IX〕フロイト（1940）「精神分析学概説」『フロイト著作集⑨』人文書院

〔X〕ピーター・ゲイ著、鈴木晶訳（1997）『フロイト』みすず書房

〔XI〕A．フロイト著、外林大作訳（1991）『自我と防衛』誠信書房

〔XII〕飯岡秀夫（2006）「フロイトの『本能論』―フロイトに於ける『心』と『本能』の探求―」『高崎経済大学論集』48 巻 3 号

＊なお、フロイトの著作についてはすべて『フロイト著作集』人文書院（1974）により、その巻数とページ数を示す。